

文恭院實紀

二十

庫	文	閣	内
三 一 函		三 六 〇 六 四 號	和 書
一 四 架	五 五 冊		類

庫	文	閣	内
一 四 九 函		三 六 〇 六 四 號	和 書
一 九 架	五 五 冊		類

寛政八年丙辰
自正月
至六月

史六〇

内閣文庫	
番號	和 36064
冊數	55 (20)
函號	149 36



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



寛政八年丙辰從正月至六月

文恭院實紀

二十

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 寛政八年丙辰 and 文恭院]

文恭院實錄

二十

寛政八年丙辰正月元日

文恭院殿淨安紀卷二十

寛政八年二月十日

寛政八年丙辰正月元日

二日又同

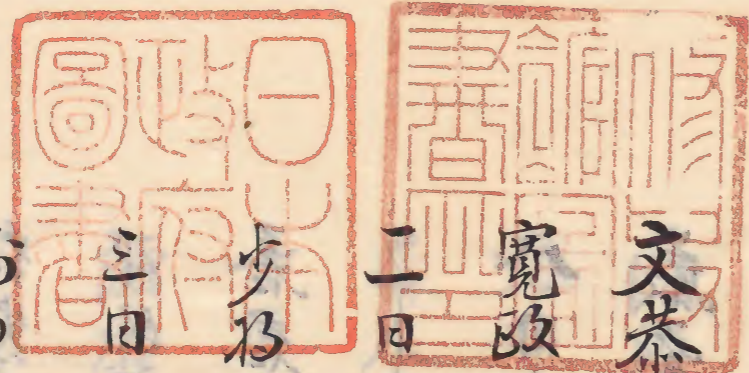
少右治部卿

三日

傷の

五日

六日



賀儀のよしとて大御所御前へ御書付申上り候事

七日若菜の法祝儀小田一喜家宮系長門と義深
伊勢代急使中條山棟と位後、京都法使織田と
中條位由、日光代急使とも小田の御書付申上り候事
若君法使の子令きとて略たす小賜物の旧の
よしとて大御所御前へ御書付申上り候事

八日東叡山 奉書付申上り候事

嚴者院殿 奉書付申上り候事

後所院殿 奉書付申上り候事

九日去りし五日法持りのおくりを封しあ番の士

二人時辰を初め候事

十日東叡山 奉書付申上り候事

諸廟等 奉書付申上り候事

涼瀆院殿 奉書付申上り候事

至心院殿 奉書付申上り候事

十一日具足の法祝儀のよしとて連歌を奉書付申上り候事

由賀申す。同日紀伊系中納言重倫の侍下にておは
す。祝す。不令然山王社へは侍多部出羽守長
交代多を去り馬資金進薦す。其の
善買は使を並ぬ

十六日日本口若名所侍身流々女いけり若名を賞
す。色て白銀五枚を賜ひ又侍多部不老養枝持
一日小糸五合はくを下さる。北河邊遠言
十七日如紫山

淨宮は福あり西條より安藤對馬守任成代奉
そ
十八日頃の庭園不成らき。子法洋物ハ小贈也
里この日相模國小田原の城を大久保加賀守忠
就政仕してその子出羽守忠若菜色十一万と子
百廿九不勝を築く。この忠若ハ故か賀守忠由ハ
長子ありて初名直次郎とす。明和六年十月
廿四日父々遠原を弔り。帝繼の間小列し。その

年十二月十六日壬辰方東つとありたれ同ハ

年九月十日

心親院殿在敷山へは物送小より整潔をくら九

年三月二日大子方防火命さる色のち志ツ

より安永三年十月十五日

後明院殿小初見したてまつり同ハ年十二月一

日始まは存の存たまひそのと一初尋してか賀

事と移して明三年正月二十日原七日小田原地

震地擗破壇小よりその語を免せぬ重玉子為共

傍さる色川渠後利雨致も志ツ〜わしてさふ

段仕して正月二十一日上総介とありたれ享和

三年八月八日回十四柔みしてさるさぬ

十九日法急馬さる物漏まきさる家より厩方の家

物物あり

二十日在敷山

大猷院殿

有徳院殿雪麿小本多強正大弼忠壽代各を去り
一十八日此稻のとう多射し番士時段を初小
廿一日大川のほくら成らとられしつて若崎
の田郎之妻を甲小ほらつうは浮物若年
里この日記伊中納を治賢の多戸中納を治保
は使しては存の路はくハ、まふまふのほら
初しまらふ
廿二日吹上あしてう揚るああり苗座の初程

傷のそし傷ハ十フ小初りむしを重およう
ふ小及らう
廿三日きの小う揚るしゆ漏しし小初りその沙
小里系鑑次郎持家時段を初ひ射手の半小納戸
矢檜熊と則良全しゆ徳春の士貴金を初小
たふまらしサフ。法成の初り番射し番士時段を
初小
東殿山

口の養嗣たるをへき子を戸田兼女正氏教安藤對
馬子信成は使して仰はるはさか

由緒方の年記

廿六日奉教山

至心院殿堂牌ふへ平岡貞澄子教長代名を西博
目付見傳五郎若忠先と目付とあり田安郎用人
羽左衛門左衛門正登西博目付とあり

廿七日雪降しふより二三日より使出はさしき

伺ふ大審より後系米廩の事をりしき山教馬

孝を因し与給ふは系尾郎より使して其借指

柄を相合の存を然きとあり而定をり由同甲發

書系御年考しをして後務はゆふしの子福きし

ふ仕ありあましふより物とるして先務よりし令を

らふか 考考り記

廿八日月次も賀傷のこし閑院孫正子貞仁親王

伏見兵部口貞教親王の使者との記を國のそ社

及び市人等近來を察しとるふ大久保出羽子忠

志龍射を謝し奉りて金奉物馬を之て然る松平

伊豆守位明日光山

市宮堂原は修復惣督人令之り也又愷子代君は

子民部の高敷の養子たるに之より作出せし

しふを

市亦より本多強正大弼忠義は使して愷子代君

の偽お國祗定の比刀奉物と一種子足

若君より奉物と一種子百足

市亦より民部の高敷の比刀一様子足

若君より一様子百足

市亦より中細之治漏の一種子足

若君より一様子百足

子部の高敷の比刀の比刀治漏の一種子足

市亦より左刀馬資金一様子足

若君より左刀馬資金一様子百足

市亦より左刀馬資金奉物と一種子足

善君へ右刀馬換金一様五石足
たてまらうれ控

子代君へ家士版田能平易位使して

淨ふく左刀馬資金金物一様五石

善君へ左刀馬換金一様五石足
兼蓮院尼 一様五石 刑部口

法園口 善中

淨ふく奉物一様五石

善君へ一様五石足
善君へ家士二人位使

善君へ一様五石足
又水戸世子へ使

して法君の贈をくく子日門へ
給る取時銀十本

月少祈禱の科として法うハ
善君位使善君大伴

右京古夫墓之好り

廿九日縁山

善君院殿堂廊下法福あり
今曉地震を 善君日記

小の月白牛酪を齋く事を令し
善君 世小傳少子 不喜保手中

房少族を小白牛を救養せし
りて白牛破製法を

令とく子その儀小ニ
好りしは時代より
七十子以小五子
よて教訓の乾破を製せし
りて善く世人をすくハ
せり小は悲願のいし

有クたき子ふこそ寛政の壬子五月辛酉登極井原
宮白牛碓考一卷を撰一様不行

二月新白本書院へ出り一日光山久能山は牘

法鏡の研いたくくさり小日光のまほ芳ふより

凌雲院前大僧正して古力目録よりさる色乗

首の賀りさ子その他青蓮院門跡安永心院宮の

使者山門惣代日光山惣代上野一山を國台宗の

僧徒等も賀儀のそし

二日小参請廻り大春入りの十五人

三日古井能登多利貞三國志摩さあ次ま本甲後

書一頁因沼溪路さ嘉明大坂加番今さる能登

書貞利在色水色ハ駄をさるそ傳くらふ

四日吹上園不成らさるれ夫より一橋邸へ三書

らさる子この日松平豊後守高室の父政仕松平

上総介重家は存の勢を下さる使者酒造在在相

口者法使より

五日淑姫君は子愷子代君へ孫娘のより一橋中納

之治瀧口及部口高敷口のしとく安藤對馬守任
成本多強正大弼忠義は使して作はるはさふ
て古田内中守資吉は使して尾張大納言宗隆の
紀伊中納言治室口小戸田兼女正氏教は使して
多戸中納言治保口同治紀部臣小作はるはさふ
よて三品の方と使して智くたてまつるは平伊
多子信明淑姫君は再嫁の事司ふてしと命を
ふ

六日播磨國三草の原を丹羽長門守氏福政仕し
てその子如助氏昭をして領地一万石を統率しむ
この氏福は武部少輔氏業の養子にして實はそ
の弟巨勢大和守利永の二男なり初名は龜五郎
なり如助氏福はその後裔なり改め明和元年八
月八日やゝあるは九月十一日家法を安永六年
五月十五日初見しなり九年十二月十八日取壽
し今の名不改めしなり六年九月

後明院殿は新葬ふよそ山の新法多口の成をな
り寛政元年十二月廿七日大番の邸より
手四月廿五日破を遊しし致仕して後室系
と改めし保十四年閏九月廿四日八十二歳を
去りぬ使番渡邊左衛門者使して松平隆英
高村又致仕古島隆智重村は有の勢を下
七日淑姫君五姫ありし家の方とありし治
紀元はまのの屋もは為教あり祝しむるを

らふ又濁法^信衣以上の事ありくまの
祝しなすしる紀伊お中細を重倫
善君は後多の予祝しなすれしふり家人
たま書をさしあつた家者達院門跡の使しつ
その化弱ありて始たり小使番具は内記
と松平隆英高村は法智の勢を弱
八日奉教山
後明院殿は新葬ふよそ山の新法多口の成をな

皇國名多の及忠納戸細路幸山三千原系賢小納
戸と名里佐波をり大林与兵衛親用子孫門親中
形小石出され小細戸と名系 孫左多の
と改む
十一日去り九日淨成の初りを新し番士時服
をたす

十二日三塚山

信院殿雪齋小松平伊豆守信昭代友と

十三日陸奥國八戸の願至南郡伊勢守信房改仕

して奉多より信共その遺願二万石を襲くこの
信房ハ甲斐守信依の長子とす初名繁村とす右
とより安永九年十一月十八日初見したるま
つ里三郎元年二月十四日家法中し回しき二年の
を叙舞して内務院と稱し寛政七年四月三日今
の名不改めり小改仕して後文化八年雜撥して
伊勢入及と稱しして保六年五月十六日七十一
歳ありてより名改善清をり長岡阿波守繁越旗を

行とあり小菅後を仍神保佐渡と長光等後を以
とある

十五日目次のあ賀傷のこし加藤佐内春満を
めと見したてまつり丹羽和助氏昭家信を
誦しなり然りとのと大久保出羽守忠吉の
就封のあたまりふとの十一人出羽守忠吉者馬
侍後守氏保はしめたり僧侶謁見をふとの
あり佐見まろ松平但馬守昌隆をしめたり赴任の

あたまひ下金五枚時服小羽折入て弱小又大
番頭中坊河内守廣看菱沼織部正定若二條左番
のあたま小羽あはし同く組置番士と舊のこし

大猷院殿別当在漸院

津光院殿隨性院殿別当勅成院其小別当殿を御
しなま又ま(国)の僧侶柔首を賀しなま

十六日新番佐と与左衛門の政徳光免して小菅清
と新番長をたす小菅忠大友武部右輔義珍等

ふまゝふは左方の改ゆふふ連款少里村昌逸
をすめ連款ふかりりふ山の賜物ありふふふ

十七日紅葉山

清室小松平伊豆守信明代奉を

十八日漬の庭園ふ成らふふふはみつうふ鴨

雜鴨小鴨を洋珍ふ

二十日赤飯山

秀基院殿堂牌ふは信田井隠岐守忠貞代奉

是苗守居酒井因幡守忠政而定を以柳生を孫正

久通

清基ふ用人中ふふふの改款目外物見長門守

正登徒改小室京平身遠兼石及細工改室田金長

歩の改良而定吟味改而納戸改入保内孫忠高

淑姫君法入輿の子をりふ又小室信をり石堅筑

あさ花丸西城後園葉葉のふ令きふふ

廿七日上子葉のほろり改存ふふふふふ

は獲物の、其鴨志為相侍り、小末等、小次郎たてま
つり、家には内書を賜り、小次郎の、武成國
臣の城を、阿部豊後子正清致仕して、善子播磨守
正由、願知、十万石を、襲しむ、この正藏、能登、正
敏、二男なり、初、小、豊原、小、兄、織部、正保、又
小、先、た、ち、て、失、し、う、い、正、復、羽、子、と、形、ノ、下、明、二、年、
七、日、新、日、初、月、一、を、り、その、を、教、育、し、て、美、佐、守、と
稱、し、日、一、七、年、五、日、家、業、を、後、今、の、名、小、改、め、る、小

致仕して、後、享和二年二月七日、甲午、卒、ふして、五
十六、この日、新、番、重、久、在、り、つ、信、志、同、一、と、改、め、
なり
廿二、田、安、邸、田、人、法、多、五、年、を、出、つ、一、考、右、考、つ
考、為、一、区、つ、法、少、う、に、実、祿、を、俵、と、な、さ、ふ
廿三、百、去、里、一、サ、つ、百、法、年、の、お、り、を、新、一、為、番、の
廿二、人、小、次、郎、を、賜、ふ
廿四、百、末、後、山

孝忠院殿皇孫小本多孫正大弼忠義代名を
与ひ大橋与兼兵衛親美老免して若令と水子養
殖あり小姓年國外死存

善兵衛小姓となり小納戸奥山八十五郎良恭存
合口八久疆平臣國右衛門乃忠志山三十郎素賢
とあり

善兵衛附とあり小納戸境幸と如美果との与
とあり

廿五日奏去番松平伯耆守資平病免して存の旨
席とあり

廿六日奉教山

至心院殿皇牌正小戸田兼女正氏教代名を先
手自以松平倉人行初小善清を以て外系

廿八日有次の賀儀のとし松平祀おさ治後い
め就封の由たまふとの二人阿部播磨守正由南
部より任其物を然し其小治封を耐しきふ甲府

三月廿一日京中條山城守佐後京よりくろく謁
まじ巴の法祝として日光門至公澄法親王使下
て二程一存まいつくさく色安楽心院宮同く法
詞をそくくふ同くすふくくの家よりあましく
を杉平強心大弼務あめして法ふましく一橋中
納言治満つこり名龜之助君彦子の事仰せふま
た尾張大納言宗睦つこり日めしてあましく傳
へらふ

勅使

院使を急ふくく杉平伊豆守佐所法使して磨岩
をくめらふくく象大友武部右輔義珍法使まじ
この日阿茶院より貢物回めく
二日は直齋をくくれ白本書院へ出くひ公口引
忍あり

勅使勅修ふあ大納言経逸つこり桂中納言者政

院使松小路前宰相定福は對款あり兼そのは
礼を以て...
為清也

禁裡より法左刀黄金三枚
院より法左刀黄金一枚

中宮よりおれしくを教進さるるその代摺
つ跡勾当内侍の使者のよし有り司閏白

左刀目録をけし関白宮下を謝し東本願寺門

跡光親に後度大僧正を謝して左刀目録銀五枚
時服二十をたてまつるをいへたるまつる

勅

院使物を然し自死見事公口奉本願寺の事
をまゝの俗人冠帽奉度師を御濁をいへたる
事後同より此任由を公口の旅館には使して
鶴一存録をまつる

三日丁巳のは祝儀のよしこの日公口及奉つる

家へ使して明日の夕方、小猿宗意を召し出さし
けりまゝのほろも見あふてとよしを伴はく
いふ所
四日長のは移めして大層多しと申すひ公に及
左門様御様承あり申樂ち若て少老を召出せ
種園舞臺小出て能はしむしを傳ふ米
弱三番叟老巴^巴の類大會祝主金札を二番こ
本柱花見座頭ありこの事申樂ち又時よく

頭あり要御度甚な傷の如くありてを
孫とよよ
五日公の御見し物物あり勅修を大納言
逸口子様前中納言を政口と申し銀二る枚
把
善君より銀二枚梅小路前宰相定福口銀二枚
銀三枚
善君よりお水くくる枚摺の使老等み

物あそびありを誘ふに使者よりいふに大御所は
御甚し不淑姫君よりいふに去るべき子を物あそび
つ跡光輝の本多強正大弼忠義は使者して鑑する
枚鑑二る杞
善君より鑑二る枚
甚の上よりいふに十その化坊及家司は白鑑
時報をたきふあふのはよそひに引見の日も同
しに物あそびありを誘ふに使者よりいふに大御所は

六日寄令甲斐左兵衛助正勝子左兵衛忠憲を
しめ父死して家法くもの十人而定細路も准し
た子務与八郎忠昌同細路もなまふこの日矣
あてあそびのは遊の遊あり老臣少老乃子事を
免さふ番廻の國柄已班女葵上張良陣本弦上樂の
附祝言は喜樂程言の墨壁口其似は系左兵衛外
七日令親公の所を去して角落を
八日赤飯山

後明院殿臺座小を因内中を資寺代各一甲一山

の目今録の成りたる事一甲一山に於て

蓮光院殿臺座牌石は俗白須甲後を改遷代各を

小善信廻支碁廻路に楷藤老多の成り如定吟味

後と如里新番と尾藤身流に寛その理法とを

ふろ小善信は奉修之の事實未小あふてくると合

せり子 憲法が類

九日午あより吹とて如くを如れ文より因部へ

くろをり小火災巡視根奉右系正を病免と

十日吹との花園へ成らきと大酌は境ありこ

の日

善美表へ出さし一法座敷は巡視ありこの右虎の

口の相平及身流の邸宅より火起しより宿老

少老まゝのほりは起居を伺ひその代もあは

し其の由を留せ見のは櫓みして勤り小 善美日記

十一日使番花為助右多つは為小姓廻と因中根

米馬河厚光を召出とけり大番を召出井権左衛門
つ順亨形を召出とけり大番を召出井権左衛門
密奏者番まゝの御り法をいさ何小同し子小
里之家及び世子より使しては起居儀をいさ尾
郎より鴨居をいさ何小同し子小
あ清ふへ進うとけり子

十二日縁山圓入大徳院大徳院
信院殿信院殿原小本多強正大弼忠義時代をいさ

十三日王子村の御り成うとけり子雅子を御り
中少老を召出雲多種月陰長して雅子を御り
子光を召出井内飛田富所召して召合とけり
依竹右京左義和殿使しては御の御下されし
を御しを召合召出所遠出火を召合の御へし
らと御ひてその御を御り真在日記
十四日小幡信をり不聖院を召合召出目付小長谷
能登を改良御定吟味致不入保内格中宮御定所

修築の事なつてしをしてそのついでに
その代に所為の更初めあり
十月月次の賀儀のついでに伊中細之江空の
もとへ戸田系女正氏は使して宛封の事仰は
りいさふ

善又より三程二程

皇のつく二程つるあり同同一年候字アリカのほろ
きみしたてまつるは是倉惣ありて夜島を下と

子回しあせし見えな子と急山を江も登運おれ
しく宛封の始たすふ又そしく湯を降ふもの
大番頭松平下野子康乃子軍次郎康正中坊河
内子康看子綱子郎康彭西城苗子居不野之儀後
廣通子長承^藏廣江小姓細子郎大久保在左衛門
右友子龜次郎忠貞西城表の番の江と山六左衛
門安親孫孫子承安通孝人各教多し力に居る子三
郎左衛門忠恒その代の者教多しお孫為馬守佐

成のもくへ小納戸大久保吉佐忠侍にて実母
より一を吊懸せしむる 貞右日記

十七日紅紫山

清宮小戸田采女正氏教代奉も

十九日巳申刻

清宮小戸田采女正氏教代奉も

廿一日

甚のくへは安産は祝す

仕あり同日より紀伊中納言治室の同方
つ垂倫の使まつる
廿二日君臣出仕あり同日君臣同七九日
福中川番とあり

廿三日尾張大納言宗隆のものとて右田侍中
資也本多強正大弼忠善は侍し 院殿
法回 君臣の事仰はあり 院殿
同少右治紀朝臣へハ戸田采女正氏教代あり

ふよそ大納言宗隆つまのほろみへたてま
つらふはまろつらう磨斗抱まろつらうれ祝酒吸
物をたまた中納言治保つらう治紀朝臣同く
まろのほろ祝したまろつらう
若夫も同く宿老右田内中宗資寺助普少老
宗格内中宗資も久し同く宗資も宗資も宗資も
源三郎正房その細目とあふ書物より萩生小三
原義法承免氏

廿四日 赤敷山

孝恭院殿皇太子代各使まろつらう
治差様小
つらう

廿五日

清基承承物十二様多足
尾張大納言宗隆つ
多戸中納言治保つらう
清基承承物十二様多足
尾張大納言宗隆つらう
清基承承物十一様多足

為淨亦一様五足は、同若門重倫口より

淨基亦一様五足は、同若門重倫口より

為淨亦一様五足は、同若門重倫口より

淨基亦一様五足は、同若門重倫口より

為淨亦一様五足は、同若門重倫口より

淨基亦一様五足は、同若門重倫口より

為淨亦一様五足は、同若門重倫口より

淨基亦一様五足は、同若門重倫口より

為淨亦一様五足は、同若門重倫口より
淨基亦一様五足は、同若門重倫口より
為淨亦一様五足は、同若門重倫口より
淨基亦一様五足は、同若門重倫口より

為淨亦一様五足は、同若門重倫口より
淨基亦一様五足は、同若門重倫口より
為淨亦一様五足は、同若門重倫口より
淨基亦一様五足は、同若門重倫口より
為淨亦一様五足は、同若門重倫口より
淨基亦一様五足は、同若門重倫口より

子中矣小姓能登る知鄰昆刀の役留る居居井因
幡子忠致見したてりし里犯おる知院因幡子忠
致にとも小姓五枚時彼六能登る知鄰に能二
十枚時彼とは産屋の事なりし少先井伊兵
部少輔直朗の時彼五をたす小又松平伊豆守位
明は使しては出生のたて家則の法刀能免の法
さしそへは産衣二襲二様子足法不まのりさる
とそと致と即君と移りまのりさる

清甚下より女房は使して御子十把は産衣一
襲二様子足

若君より金の本多強正大弼忠壽は使して長谷部
國重の法さしそへは産衣一襲一様子足様淑姫君
よりハは産衣一重一様子足まのりさる
廿六日小姓細多根草之助政信同し子政と名ふ
小納戸政和之河伯考子西廣は産刺勤し小より
西澤ふより巻物をより

段下カ

廿七日教之助君の事より、孝臣等出仕ありて
加へたるまづ、同く、予より、在國在邑の十万
石以上の家使、その代に、札札、一、致仕、幼稚
の輩、札札をさ、く、西隣、く、同く、

廿八日

淨慧、不、は、安、産、は、祝、く、く、く、因、兼、女、正、氏、教、法、使
く、く、尾、張、大、納、之、宗、睦、く、く、
為、淨、不、く、く、二、種、子、足、本、因、内、中、子、宗、睦、く、く、死、仔

中納言治室のく、く、二、種、子、足、本、弟、弟、つ、重、倫、の
く、く、同、く、く、一、種、子、足、本、多、強、正、大、納、忠、壽、く、く、
大、中、納、言、治、保、のく、く、二、種、子、足、本、治、純、のく、く、一、種
子、足、本、のく、く、く、く、同、く、く、予、より、日、光、のく、く、公
澄、法、親、之、使、く、く、
為、淨、不、く、く、一、種、子、足、本、教、之、助、君、のく、く、一、種、子、符、藏
のく、く、く、く、く、く、安、宗、心、院、宮、のく、く、く、く、
一、種、子、のく、く、く、く、

廿九日

清甚不仕産屋の事人をりて一箇子居る伊賀
了雨送時報回
清甚不用人小室系久兵衛義武目付小長谷能登
守政良也而三法郎小室系平兵衛常方金二枚時
報二納戸既字田川年七定義時報三矣右平能
秋原系平伊賀政山時報二報不其地其事あり
る也一室物物居あり

四月廿九日 月次のお賀例の事一報之雨君若子作
出され一法統一松平伊賀守信の法使して
尾張大納言宗睦の納言五十九枚銀二十枚
善兵衛より三十把二十枚
清甚不より一奏物十一種五足聖聽院危の方
奏物五二種五足
善兵衛より二種五足
其のより一様五足法三の事大納言宗睦の

ふいさりのほろり色を力重に枚巻物二十たて
はら丸錫見ありは重小備利元のほろりをた
ふ致之助君の松平強正大弼務當しそ力能
三十枚巻物二十たてすつら色お錫ありて致し
まろふは中納言治保の少将治紀の同く錫
見ありはまろり鑿斗炮を法ありそ外強正弼
務當目錫しそ大納言宗隆のふい使しそ
善美のまろり重二枚巻物十

淨者ふ小巻物十二種子足致之助君のふい
善美のまろり重二十枚巻物十
淨者ふ小巻物二十二種子足登聽院のふい
淨者ふ小巻物五二種子足
善美のふ小二種子足紀伊中納言治保のふい
淨者ふ小一種子足
善美のふ小二種子足
淨者ふ小一種子足
淨者ふ小一種子足
淨者ふ小一種子足

三日先子為延極村草人正智子書院著一子正福
之其父死して家法くもの八人小多信醫を須
云云 孝子玄竹恒徳、冥福正石のち五
十不別られて四者五十不弱小又細戸番一人大
番五人小十人より一人新番小多信子この日未
の中牌頭より 冥福正石 冥福正石 冥福正石
浄不表小臨きふ家 冥福正石 冥福正石 冥福正石
四日先子留延入大之原利恭大附家城改を免

冥福正石 冥福正石 冥福正石 冥福正石 冥福正石

六日日光の至法寺山小多信子中條山城守信
復は使して法務子を移りて子小多信細てを
番を免りて冥福正石小入りの十二人

八日赤飯山 冥福正石 冥福正石 冥福正石
後所院殿堂藤小松平伊多子信明代多信子
條河内子信義日光山 冥福正石 冥福正石
浄宮本多中務左輔忠邦 冥福正石 冥福正石

雪隠殿其下

若君代各使より若津播磨より政村平貞他

直島参礼より今より九月の御孫小孫お同

日一日は登山より早々の御孫は對面あり

餐後小

十日正表へ出まへ武技は境より布帛三反

をたまふ

十七日お孫お馬お伝成

御者おは産屋の子はとめしをてお湯し時辰
をたまふ同しは七夜のは祝として二家の方
々々しめ参居皆出仕あり紀伊中細き浴室口回
お黄門重倫口右志し傳して祝を

十二月之縁山

懐信院殿雪隠小方田御中お寶書代各を授上

方丈

御者おは産屋は祝として使傳して

為清亦入昆布をせしむる事

十三日侯園小成らさうれ齋雅鴨抄らさうらふ

十四日目付建部六右衛門廣寛先を自取となふ

十五日同日

為清亦とも小吹上の巻園小切たさうらふ

十五日松平祀後書容碩松平安齋重晟と松平

正次弼治廣佐竹右衛門義和伊達をばはる村壽

松平上総介高政をいれ各親二十五人

十六日湯島根生院塚貞大塚護持院修葺たす

めらふ松平左衛門佐直周去存十丁の退出のお

目高輿の物取いとるくみこをもて百人廻の

與力同心啓めしういお世をて實際通しハ

いとひうす小中へ借のまのりらりおきやうふ

そのうハハのい福尔をくれそく上は物取柄

をも海さふいおく甲付等閑とるす起りしふら

て世世をいみつらうの啓中付てせしを先臣

もて傳へられしより、あふ引籠りしを、
しりしは、あをささるる、しりしを、
しりしを、しりしを、しりしを、

十七日卯時

清宮は、清宮の、清宮の、清宮の、

善代後

善代後、善代後、善代後、善代後、

十八日、十八日、十八日、十八日、

清宮は、清宮の、清宮の、清宮の、

中宮は、中宮の、中宮の、中宮の、

しりしは、しりしを、しりしを、しりしを、

房は、房の、房の、房の、房の、

尾郎は、尾郎の、尾郎の、尾郎の、

孝は、孝の、孝の、孝の、孝の、

井伊織は、井伊織の、井伊織の、井伊織の、

山

清宮は、清宮の、清宮の、清宮の、

下子小長清三陸藤左衛門正角大坂積元を以
とちさふ

十九日長谷川山城守達和子中興審大守達与
押田任濃守岩孫子小納戸藤右衛門務融合橋長
左衛門政翼子書院審之序五郎政利又保右救
子吉之丞忠義とて父政仕して子忠法とての
二十二人山城守を和任徳守岩孫長右衛門政翼
ハをのく岩光の科初小松平隆矣と高村の妻

うましあうう奏去番牧堅日向守貞とてて帝歴
きんふ

二十日赤坂山

大猷院殿空之殿小松平伊豆守任明代冬と日元代
各使方中條河内守任義祭礼のまじり糸津播磨
守政色松平長右衛門直高とてり湯と
サフ百苗守居方我伊努守助送は誕生のまじり
里回一暮目の政春守甲斐小姓とてり助猷日冬不

の致小納戸以不龜井驢ゆき清客回良刀の致令
まゝ

廿二日松平隆英より高村文政仕立皇清習事村病
重き小よを奉告番松平月助より康定もて召向を
らふ西博より小因

廿三日深川の侍より成らざるは西教諭より
五位なりは程不い小因新因一摺邸別墅なり二
九箇より居込六郎左衛門守富老免して奉令とな

ふ時彼を福小使番内因等刀正央病免して致
しく奉令となふこの日龜く助のうと尾邸へ引
移新如く漏しふより
あ清不

老のよ小解朝進とまゝ

廿四日赤飯山

孝聖院殿聖應小京極侍あさる久代奉令とな多
中務左輔右近日光山よりより賜と小奉給廻

より書院番より入るもの二十三人

廿七日 二日ひは安産法祝とて東西本願寺より

皇國の御慶びに奉りて又祝仕立奉りて書院番より

書院の上小巻物十一種子足

淨水

善君へ一程子足西勢口より奉りて

淨と方へ一程子足奉りて

廿二日 小姓廻り田八郎虎利老翁より小巻物と

なる書院番より杉平隆英より高村又政仕立奉りて

重村より奉りて奉りて奉りて奉りて

して香寶の銀五拾枚を賜ふ

善君

書院の上よりとは懇詞奉りて

廿八日 月次のお賀儀のそと瑞子の法祝とて

善君へと家のあくるそと同日に致仕世子杉平

か賀も法儀との代書代り奉りて

兜をまひりしを
浄土
善美
浄者系及淑姫君より致し助敷し助為君は法親
王后吹骨一信しき子位徳鬼一人多濁をよ抄法
川善光の權僧正位後子權僧正系後山福聚院の
別当破を謝しき子
廿九日目録半段左者事つ正定塚をいふは子

明日之縁山

者善院殿聖廟の法語あり
二月廿日杉平加賀子法僧各親を井伊掃部直
中杉平漢成子秋保杉平を忠直直月純直のいと
内たより小漢成子秋保のまゝしきをみよお抄経廣
の法刀直島をたより小日光門を傳し瑞年の法親
しき一程
善美のありしきをよしきを安永心院宮より詞を

そくしう子大春田沼能をも多段新在殿行は直
規二條成設をそくしう御錫をよき番せしむ

二日王子の降より成るるに王子の法祝を

てと家の方とてすめ万不以上の人の為本殿を

門跡傳下す時段をたてまつるは

善美なる御所

三日先主の御所長つる後身善美子小姓伊賀

後傳善美御所長つる善美子より善門一橋邸

御人善美を御所安貞子御定御所殿善美子林を

しめ父死して御所くもの五人

御所御所安善法祝とて御所院大僧正傳し

と御所御所一奉一奉たてまつるは御所

しと御所御所善美御所善美御所善美御所善美御所

御所御所十一様御所

善美より御所御所御所御所御所御所御所御所御所

御所御所御所御所御所御所御所御所御所御所御所

紀伊中納言法皇の御方より倫の
浄者も此安産は統々としてたてまつりし
みよを忠告せしめしを奉をさるる事子信徳忠一
人始たまふ

西白濁節のは祝儀の事
善君は獲の事なりしを糖なり永井堅物直孝小
善君より杉平金人位初先を留置岩本石見守正
倫長谷川中河原佐正西博目付後也久飛紀長

浄なりし祝儀吸物を初ふこの日
善君は獲見りし

西白濁節の節の博を以て日向を総博致仕し
てその子も殿以総沙の六万石を任りしむこの
総博之類に一様所收を総恒々二子あり知公内紀
又宗十郎より小石日向を総純く若き子となすお
永正年七月廿日忠告をその冬お奉して今石
小政の寛政元年八月内梅田の野原田一回年

三月西條大工つを成王同一年九月二十九日春
とありき小政仕してのち文化十四年二月十五
日入乃して龜山と稱し文政二年三月七日六十
一葉ありてその中奥小姓奇田之著以定静病
免して奇令とあり其後密三人明たまふ小

八日在敷山

殿者院殿亭廊

心觀院殿亭牌之は諸あり又同一年の

後西院殿亭廊小安藤對馬子任成代

十日在敷山

第壹院殿亭廊小本多理心大弼忠壽代

戸押田藤方衆つ務融根末田後長口同一年

なり

十一日序表之階をたす

序表之階をたすは法能あり酒法

大なる旨味あり味を若番兼の間縁諸

為衣とこの字は法眼の聲多きものなり
子子とゆふされみこり小席とありて長を下
さふ能ひしめの子少先據田撰律と正教をりふ
審廻ハ喜妙ハ島羽衣小結治祝之金札程と二審
未廣りり柳山伏申樂土及及中へは銀若糸を
下さふ

十二日と縁山

惟任院殿高皇原小戸田兼女正氏教代金と高家大

友因幡と義方日光山

淨宮外進宮にふり

為淨亦代各使令とこれゆたす小小細戸加藤左

金と奉豊

善君小姓とあり目小細戸本多八求永貞細戸

正字田川平七定義小姓細竹川平十郎昭忠江原

孫之原親善大河内平十郎政良孫訪平身和正源

金田傳と多つ正善武川草之助恒お字那堅金右

湯つ正用上屋務回承正乃書院番龜井平三景法
亮小納戸とある
十三日去冬十一月は能乃答臨りし案ま
の序り先臣由渴一淋一たてまつる位(清國)版田
城を堀大和を親氏とてする所ありしあり
續三郎親雲を以て送版一万七千石を賜ふむこ
の親氏、實に大和を親長、四男にて初は
幸之進とて親幸とて是乃内也親力とある

とありしは明回承九月二日家院を寛政元年二月
廿八日初見し三年十二月御書し今の所不改め
同一年公口版伴の事をりり同一年八月五日
位抄版田より二十と案ありてうきぬ二の日大
番柳原安右衛門正心二條左衛門とて心相ひ
うきぬさき小坂倉子の事記しをりて未末を
正之小坂倉とてめりて正心隠退とてめりて又
隆英(國)二本松城主丹羽が習う長妻人際の子を

元々れ子大炊頭長祥子遠順松万七郎を法
一むこの長妻ハ重との若狭守有備一子ありて
知名を室松丸五郎左衛門とり小和三年正月
二十七日襲封一二月十五日家法を一を謝一そ
の為叙齊一して左京大夫と改安永元年十二月十
八日四位少輔、み同一回年二月七日加賀守小
改めその二月廿日甲抄川原後利助叙一し
是時ふく二十場公事一も同く一は元正二年正月

行字カ

去甲一を大員のをう後國清防の子孫興を
寛政元年三月廿八日濃勢右少の川一候理をハ
一しふりその二月廿ふく二十場公事一も同
一く時ふくに詔そくしてふれその十二月信長
不任一も七年四月十六日後子法飛火者命を
九月八年三月二十七日卒を四月二十日
十月三日塚山
文昭院殿皇太子安永御為馬子信成代後少を宥亮

松平伊豆守信明日先山といふ内たすひ湯乃
ては子位より羽織をとりてしる

善君より同し

巻の上より縮玉及なり

十月日次傍のより小姓廻番以久保豊前守

忠通和歌山このは使意よりぬたすひ物物を

十枚なり松平越中守定信宛封のぬたすひ書尾

を下さる戸田兼女正氏教子金八郎氏痛多郎左

亮亮元実子甚之原先弘初見一たすしつふ白本

書院ありて松平甲斐守保光本多隠岐守康完

宛封のぬたすひ石川之及以尾沙讓封を謝し左

里重海を然るに後より新比奈次左衛門昌始泰

湯と僧侶湯より小ものあり本願寺門跡先那使

してぬたす尾張守嗣子のは祝しして二程子

る足

善君より同し

浄土の一種なる足たてまのり又同くして
増する方丈より使して

あり浄土に二柱の、然る

十六日有沙井戸を直正中書院方とて

又増する伴に親香法皇幡隨院の任破とて

この日中書院人見又且法皇在恭家の編集然る

より時服より

十七日有桑山

浄土法皇の法語あり

十八日桑子てお米の法遊あり客老少先親

とて能組、和布刈実盛る成洗安宅須輪香案

融程を、入る川子多佛沙鞠座頭あり

廿日有飯山

大猷院殿

有源院殿亭上座小本多強正大効忠壽代

若英法信國都出羽長妻本城よりつる駿府

城代小糸安房守氏真苗子居多伊智子取選
善具佐伯とな子大塚護持院權僧正小住とる子
為清ふと小吹と子とる子

廿一日西城目有佐久間左京位と本城ありつ至
去院春子と今福權身流傳如西城目有とな子け
さくとく尾郎と巢初野武振はくハとる子

廿二日小納戸飯河吾左衛門つ任門有子又兵衛流
初初兄又田原正鄰山角市左衛門つ改良長谷川平

飛宮義龜井平三郎清亮
若君小階ととる子

廿四日三塚山

右源院殿重康小戸田采女正氏教代各一末叙
山

孝共院殿重康少老井伊兵部少輔良朗代各
と苗子居田井因幡と忠致は出生暮目の後その
子とる今少忠怒夫取の後嘉とる子法政松平伊織

康美西陣同前とあり書院春永井直次郎直方が
如し細江とあり清平と原時良清江とあり左

兵衛と改む 西往方万年記

廿五日多戸若つ用少羽のち入巢有る二振はしは

ウハミヤ

廿七日同前村上大寺義雄小長谷能のち改良致

之由君宮宿のちまづか 一と急きまづか

廿八日有次係のち書院春所因之江古歩つ幸

此の細江とあり納戸細江伊藤平次郎祐香お

形一紙とありて長身流と改む又松平紀おさ治

養正人古賀孫雨樸新のち一公とありて儒多にか

こうれ福二る芭を初ふ

廿九日三郷山

有書院殿雪上殿と安藤野馬と任成代久をち方家

大友因幡と義方日光山よりくちとて濁を日向山

よりくちとれしくハ高家様殿殿は古貞一と

歷考をいめりふ

六月朔日月次係のこしと井能おも利久春親を
丹羽大炊頭長祥家徳一を謝し金満を致さ
信徳湯見のしものこ人儒久吉賀孫助撰初見し
てまづふ又苗字居岩本内信正正長法出生暮目
の故そのふ先と苗字石見正倫久石の故命を
らふ

二百先と苗字山原と長考盛楠空の子ゆると

是壇入大之永利恭その嗣ふあつとふこの日小
考後より小姓細末院番ふ入考長平なり

三百松平お藤と重晟子右京左久高賢妻死す
ふよと妻考春小宮京佐渡守長光使して吊歷を
初ふ父死して忠法くは忍人七人

五百松平伊多子信成日光山よりくへ聖湯と書
院番正仙石伯考久峯苗字と名り小姓細
番頭内藤甲斐守正範末院番頭と名り小姓細

左記由田河内子位親小姓細春氏とあり申矣小
姓瀧川長門子利雅小養清細の支死とあり親則
二日京佛光寺使しとあり
淨智ふあ産法祝とあり
方淨ふあたまつりとのあり敦ふ助君法色直
ふあり
淨ふより善報二襲込程と足
善報ふり一程と足

其のこより善報一襲一程と足淑姫君敦ふ助方
より鮮翹を回し君と進了とあり敦ふ助君より
淨ふく方馬資奉物二程と足

善報ふ方馬資一種と足

淨ふく奉物一程と足淑姫君へ奉物一程と足
足敦ふ助方へ奉物一程と足を敦ふ子尾郎
より菓石を敦ふ

八日在飯山

後院殿堂廊下左田内中子資孝代友孝

九右左殿山

淨因院殿堂牌下左杉平伊多子信成代友孝

十右左殿時於會あり田井修理左友忠及下り

友親十八人

十二右左殿山

惟信院殿堂廊下は諸あり

十三右左殿時於會あり田井左殿下殿右殿左殿

就右の場たすふしの二十七人杉平伯孝子資孝

子本飛宗元初見孝子書院春以妻本佐後子秋景

孝子多吉秋初使春能勢市十郎於寛子權中承

書院春經以永井直次郎直乃子宗杉直涉小姓

細子以本目久之正正廣孝子調之助正之注以不

乃惣左中つ利運子綱孝廣運小納戸大井物左承

つ政表孝子孝子承政初大田吾左久好行子正四

郎好長金田信左中つ正表子徳左承正登

若君御龜井平三郎清亮子内記清純初見の礼を

と云ふ

十四日小十人組津田六之助政恒老免して小善

徳と此子獲金を賜ふ使者多男修理直乃持弟也

河内鏡也 家出し後大附盗賊改の子と云ふ

捕らりし其方へ引渡さししより押込るべき

と云ふ命したまはしと家出致さししに調法の事によ

て此方を懐くことなり

十五日山王祭祀雨より延滞さるる事しより

代名使より此日去用お入里しつゝ此のあは

致仕世子まで使してはきしきうく、つゝ日迄

つゝ同く使して掛香まじりをお楽心院まは

出とををそくらふより小善後より大善お入る

の八人

十六日嘉祥傳の事し

十七日紅葉山

淨宮本多強正大弼忠壽代名を代名と稱する
方丈使して甘瓜菓子花をまわす也異申のほろ
きふくふ人御守のたぬ政務をなすて小書

十八日山王の祠へは儀小條安房守氏無代名
黄金之殺進薦ありこの日吹上ふ公事一祀りの
練おを祝ひふ
淨土ふも同じ法政して御輿を護送を本白兩
ふよりふふ及ひふり

十九日小考後より小十人廻りたるの十二人

二十日在敷山

有瀧院殿堂廊は諸雨降しハ本多強正大弼忠

壽代名

廿一日納戸を堅固に造りて信じて堅固に京系具其
ふそのふと好子日つよを為博へ新蓮藕を然
しなふ

廿二日異事をもとめればは俗名我伊賀守助送は

俣して日先つ至り梅重あ糸心院室不甘瓜ま
らきこれ使番見陽身法者規と使とて増とさ
方丈の梅重をくうと子
廿二の中矣小姓鍋島伊藤子直賢病危して奇令
となふこの日小暮後小栗殿十郎某知事斬小
更さるふこれハ身持まら〜〜〜志〜〜遊
女處へ通ひうら各宿者を見〜〜と止宿者と
致さそ〜〜〜去七日〜〜同常中令宿中あ

④遠近あふ〜〜は糸のものをお擲不及ひ成ハ
突例しな〜〜その中〜〜小暮類別系又本下小
ても追存致〜金子奪取刻以味の節彼是尸陳
〜〜に遠根の〜〜あ〜〜小暮後竹内久糸〜〜糸
杉浦を平寫明子左市江富月も別令のる中重
く不習のあ初あ〜〜あ〜〜右市江富者ハ遠派不
あ〜〜久糸〜〜糸糸ハ追放たふ小暮後大物幸次
郎某ハ同〜〜事をもて斬罪小處を〜〜子又殿

十段果も為中飛而るゝめのりひをーのりさふも
のをその供も中捨軍一故去七日このくは後
形も小善清中も山十左歩つ正健方へさるく
預置中飛盗賊の取柄あるをも心符をも案不
致し正剣に力正も身持よろしくくは度と遊
女やへ通ひ一するもあやへ事不招ふもく士籍
を別らふ十左歩つ正健は通塞その化達及して
死家ふものも多し 終年記

廿四日末飯山

孝恭院殿雪廊小堀田櫻津も正敷代長も小納
戸餘木九右衛門正國形も正とある

廿五日瑞午に時辰なりし家へは内書を福小
善美よりいなき書を口たさるも小善清より新番小
入りの一人小善清紐支死と以て本に取右歩つ
聲新番へ宛さる

廿六日吾合際く山跡十取而枝もく小納戸小姓

延長谷川宗之丞保邦書院番子堅古忠忠嶽小書
 院細後藤定之丞仍明小納戸とあり小納戸友同
 藤田氏信業子席之助信實書番平堅次右衛門好
 延子業五郎好恒新小石出之九小納戸とあり又
 後番大久保新八郎康致子仙之助康高

善果の法仙とあり
 廿八日東叡山後徳院方法寺中納戸位牌廢塔代
 若山より凌雲院法寺より重好とあり



房書氏真代冬と新子以経木九方支正國只今と
 の友神下とあり

御在谷口里之御位御書之御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書



御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書
御位御書之御書御書御書御書

